新今昔物語

第41話

古堤街道を往く④

「勝福寺～百体以上の羅漢像が並ぶ寺～」

中世以来の集落である諸福には、安土桃山～江戸時代に創建された寺社が今でも多く残っています。十一面観音を本尊とする曹洞宗の寺院、水月山・勝福寺もその一つです。古堤街道沿いの東諸福公民館の角から坂道を北向きに下りたところにあり、街道と約2メートルの比高差があります。

勝福寺は、慶長元年（1596）、ちょうど豊臣秀吉が権勢を振るっていた頃に、地元の有力農民・東治左衛門（ひがしじざえもん）という人物によって創建されました。寺内の墓地には創建より古い天文～永禄年間（1540～60年代頃）の銘が刻まれた一石五輪塔も残っています。

勝福寺の本寺は大阪天満にある天徳寺で、明治の初め頃までは、太芳庵（たいほうあん）という天徳寺の老僧の隠居所が現在の諸福1丁目付近にあったそうです。また、明治以前には東向かいの諸福天満宮の宮寺でもありました。

本堂の鴨居に表情豊かな五百羅漢像（ごひゃくらかん）が並んでいることから、勝福寺は「羅漢寺」とも呼ばれてきました。羅漢像は、江戸時代に祖先の菩提供養のために大坂、京都、さらには遠く離れた小田原藩などから寄進されてきたものでしたが、明治18年（1885）の淀川の大洪水で大半の像が流されてしまい、現在は難を逃れた135体の座像と16体の立像が安置されています。

ところで、勝福寺の本堂は諸福をはじめ旧南郷村地域の集会所としても利用されてきました。昭和30年（1955）には、大東市設立のための準備会合も行われています。勝福寺は現代の大東市の原点の一つでもあるのです。

（生涯学習課）

勝福寺本堂

五百羅漢像
（「大東市文化財絵はがき第一集」より）

新今昔物語

第42話

古堤街道を往く⑤
「諸福天満宮～江戸時代の面影が残る神社～」

前回小欄で紹介した勝福寺の東向かいに、諸福の氏神として古くから崇拝されてきた諸福天満宮があります。

当社が諸福の地に勧請（かんじょう）されてきたのは寛永20年（1644）のことで、拝殿と一体化した権現造（ごんげんづくり）といわれる様式の本殿は、市内では非常に珍しい桃山建築の建造物として大東市の指定文化財となっています。当社は古堤街道よりも低い土地にあり「神を見下ろす」格好になっていたため、昭和に入ってから盛土をして社殿が上げられたそうです。

江戸時代には産土（うぶすな）神社と呼ばれていましたが、明治5年（1872）に祭神・菅原道真にちなんで菅原神社と改められました。その後、平成の修復の際に、本殿に掲げられた「菅原神社」の扁額（へんがく）の板をめくると、「天満宮」の字が出現しました。これを記念して、平成11年（1999）1月1日に諸福天満宮と改称されました。

境内には、天和2年（1682）銘の石鳥居や、元禄3年（1690）銘の燈籠など、江戸時代の石造物が残っています。また、延享2年（1745）に奉納された燈籠には「河内国茨田郡諸福村伊勢講中」とあり、江戸時代中期に諸福に伊勢神宮の信仰集団が存在していたことが分かります。

境内の奥には末社の歯神社があります。歯痛によく効く「歯神さん」として地元の人々から親しまれています。

次回は古堤街道を東へ進みながら、街道から見える風景について紹介します。

（生涯学習課）

諸福天満宮社殿

末社・歯神社